

意味的環境の認知と行動に関する研究 (その1)

—近未来の都市像に関する概念の構築 (I)—

羽 根 義
(技術研究所)

§ 1. はじめに

都市は、単に職場を中心とした機能的な空間や、消費生活的機能の集中する商業的、居住的な空間としてばかりではなく、政治的な管理機能や、地方や国に対する広域的な機能、またある都市としての象徴的機能さえ有している。

このようにわれわれは、都市に様々な機能を過大に付加してきた結果、人口問題や土地問題、住宅問題、産業問題、交通問題、災害問題、環境問題等の様々な課題を残し、自らが都市を作りながら、改めてわれわれにとって都市とは何かが問い直されてきているのが現状である。

このような状況下で、大深度地下空間利用や超々高層居住といった近未来の都市像の在り方を考えるとき、その開発の必然性や、自然とどのように調和させるか、またその都市は人工的に構築されるために、その人工環境の在り方といった開発のコンセプトが大きな課題として問われてくる。

しかし、自然や人工、調和とは何かといった概念は明確でなく、単に『自然と調和した〜』といったキャッチコピーとして使われている場合が数多くあるのが現状であろう。また、一般的に自然は人工に対立する概念とし

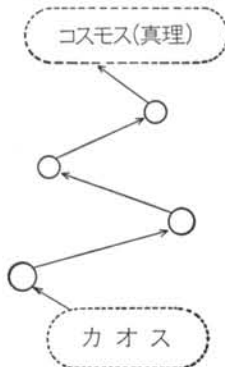


図-1 形而上学的な考え方

て捉えられているが、この立場に立つと、都市という人工環境の開発はどの程度まで容認できるのか、またいかに自然を模擬して見せるかといった単にテクニック上の問題となる。さらに都市計画においては、単に現状の問題を解決しようとする対処療法的な考えしか生まれてこないだろう。

都市は、様々な社会文化の原点でもある。本論では、近未来の都市像の在り方を、社会文化と自然との関係のアナロジーとして捉え、自然と人工、また調和等の概念について考察することを目的とする。

§ 2. 社会文化の様相と調和の概念

われわれを取り巻く様々な社会文化を通時的に俯瞰すると、いまだかつて戦争がなくならないように、形而上学的な『カオス(混沌)からコスモス(真理)へ』といった単純な調和論的な構図(図-1)では表現できず、そこには常に二つの共通項が底通していることが分かる。一つは、社会文化が進歩すると常に新たな問題点を生み出していることであり、もう一つはその社会文化に対して必ず対処療法的な科学技術が生まれ、それをダイナミックな相互作用として絶えず繰り返していることである。

科学技術の進歩は過剰なモノを生み出したが、それはわれわれの意識の物象化(フェテシズム)であり、その意識とは差異化、差延化に他ならない(図-2)。

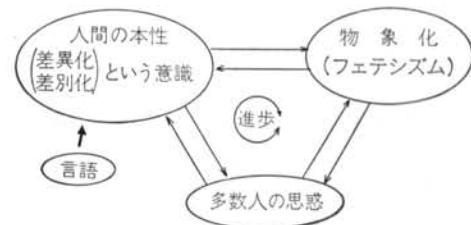


図-2 ポスト構造主義の考え方

われわれ人間は動物とは異なり、本能的なホメオスタシスとしての構造と、意識としての構造の二重構造を有している。意識としての本性は、フロイトの快感原則という絶えず刺激を求め、かつ今までの〈私〉と新しい〈私〉を差別化しようとする能動的な差異化である。

差異化、差延化という意識は、われわれが言葉で思考し、発話する限り決して消失しない。例えば、欧米人と会話するとき、センテンスごとに I, We, She などの人称を含んでいることに気づく。これは、〈私〉以外のだれでもない〈私〉を暗黙の内に含んでいるのである。一方、われわれ日本人は例えば〈われ〉という言葉に代表されるように、〈私〉の内にすでに他者を含み、自己との対話の結果をもって他者と会話するといわれているがこの場合〈私〉が曖昧に見えることはあったにせよ、やはり言葉はアイデンティティを含んでいる。

ここでいうアイデンティティとは、他者を差別化した中で得られる自己同一性であり、心理学者エリクソンのような協調性やある役割を演じることは含んでいない。アイデンティティと協調性は基本的に相反する概念であり、それは社会的に定位するための能動的な差異化なのである。〈もっと〜することを欲する〉という意識も、現状に対する差異化、差延化の表出である。

差異化という人間の本性は絶えず新たな意識を生み出し、行為や行動となって意識の世界を物象化する。物象化は新たな発展を求め、自/他意識、間主観性の意識、時間、空間意識、エロティシズムとしての性の意識、生と死などの非在のものさえ現前させる。

そして、物象化した世界ではさらに多数の人々の思惑と錯綜して、絶えず新たなモノを生み出す(図-3)。そこでは意識とモノ、モノとモノとの相互作用があるのみであり、調和するという停滞した状態はあり得ない。すなわち、科学の知は決して止揚せず、『等身大の科学』や技術進歩の抑制という、単純な調和論的な発想では解決できないのが社会文化の様相に他ならない。

このように、絶えず変化する社会文化のアナロジーとして近未来の都市の在り方を考えるとき、それは決して

完結したり、調和するものではない。また、われわれが近未来の都市をイメージするとき、ある姿を思い浮かべ、その都市像があたかも到達点のように考えがちである。しかし、都市は絶えず発展、増殖と変化していくのであり、ある描かれた未来像は都市の発達の中のある時間での一断面に過ぎない。

また、社会文化というモノの世界は、モノがモノを生むという不連続で錯綜した世界でもある。それは、未来予測の不可知性をも示している。

われわれは、未来の都市像を摸索し提案することは可能であろうが、その都市が構築されることによって、どのような新たな問題点を引き起こすかは予測できない。その未来都市の生活者の声を直接聞くことができないからである。

このような通時的な視点で考えるとき、近未来の都市像は何よりもその増殖性、可変性、また改廃性といった柔軟性を有するものでなくてはならないだろう。

§ 3. 自然と人工—社会文化のアナロジー

現代においては、誰しもが人工的に構築された都市には自然がないという。また、『自然に還れ』といった安易な自然主義を唱える人もいる。しかし、自然とは何かと問うとその答えは必ずしも明確ではない。ここで都市と自然について、社会文化とのアナロジーから捉えてみよう。

われわれは、猛威を振るったり、人智の及ばない大自然を都市の中に持ち込むことを望んでいるのであろうか。人間は猛威を振るう大自然から学び、その中にエネルギーという概念を見出して、産業や生活に取り込みながら様々な社会文化を築いてきた。

つまり、人間は大自然の一部を、社会文化に対して適合できる形に改変させてきたのである。換言すると、より良い社会文化を築くために大自然の中に、ある意味を見出してきたとはいえる。

ここで通時的に俯瞰すると、自然に対する意味は絶えず変化していることに気づく(図-4)。例えば、太古においては猛威を振るう大自然からいかにして身を守るかであった。また、大自然の中にエネルギーの概念を持ち込み、どのように制御し利用するか、さらに省エネルギーが重視される時期には、自然エネルギーとしての利用方法が問題となった。近年では地球環境問題として、むしろ守られるべき自然といった意味が付加されてきている。

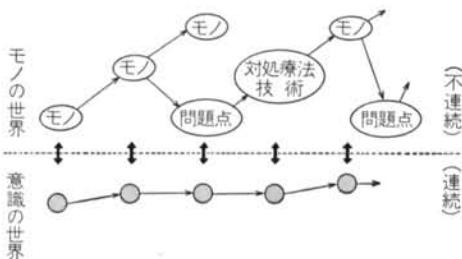


図-3 文化の発達の仕組みの考え方

このように、大自然そのものは変わらないにせよ、大自然に対するわれわれの眼は常に変化しているのである。すなわち、われわれの自然に対する漠然とした願望は、太古の大自然そのものへの回帰や、社会文化の中に持ち込むことではなく、社会文化の眼を通して意味のあるように見ている自然に対するものである。

認知科学ではスキーマの概念が用いられる。スキーマとはわれわれがこれまでに積み上げてきた知識構造で、それは個人の体験や経験、また社会的な事象一般に対する概念的知識、また価値観等によって構築されている。つまり、スキーマとはわれわれの中で意味のあるように主観的に体制化された社会文化の眼なのである。

われわれがそこで見ているものは、実在する外界（大自然）そのものではなく（図-5）、スキーマとの照合によって意味づけられた環境を形成しようとしている。そこには、自然であるのか、人工であるのかといった実体的な区別も本来はなく、われわれ自身が区別するように見ているに過ぎないのである。

ボードリヤールは、文化はすべて自然の模倣（シミュラクル）、つまり自然のコピーであるといい、またモデルは現代の文化はキッチュ（まがい物）の文化であるという。

しかし、これらの潜在的な意識は、そこに『実在するはず』という近代形而上学による絶対主義的な立場に慣れ親しみ過ぎたからではないだろうか。自然という本物があらかじめ実在し、その実在こそが正しく、われわれ

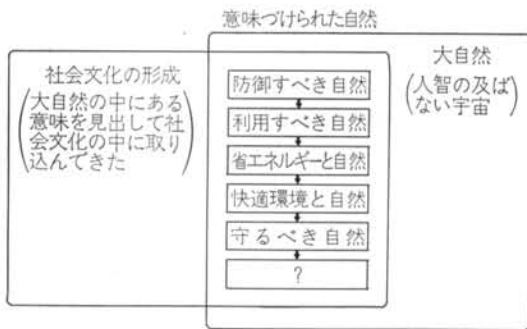


図-4 意味づけられた自然≠大自然

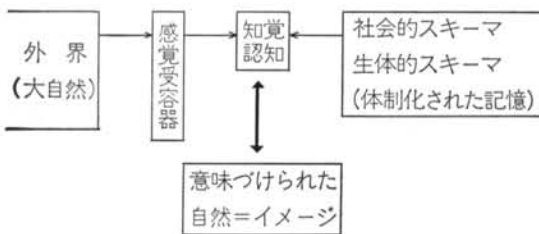


図-5 外界—人間関係の認知構造モデル

の人工的な文化は単にその模倣に過ぎないという考えである。

しかし、井筒俊彦氏はいう、『われわれが日常、無反省に「自然に与えられたまま」の事物・事象と思い込んでいる客観的対象は、実は意識の「根深い幻想」機能に由来する意味形象の実体化に過ぎない』と。現在の自然に対する憧憬や指向は、暗黙裡の内に行き過ぎた機能主義や、合理主義的な都市文化に対するアンチテーゼとして意味づけられていたものではないのだろうか。

ここでもし、自然と人工を対立する概念として捉えたとき、自然か、人工かといった二者択一の意味のみしか見出すことができないだろう。そこには、人間の存在そのものが自然の元凶として、『人間が存在しなければよい』といった極論や、どこまでの開発ならば容認されるのかといった折衷案、どのように自然の造形を模倣できるのかといった対処療法的なテクニック上の問題、さらに一般的な盲進から逃れるために開発者の匿名化さえ生じるだろう。

しかし、自然に対してダイナミックな相互作用としての社会文化の眼から捉えるとき、われわれにとって必要な自然とは、都市の機能や社会文化を放棄して大自然に還ることではなく、その自然とはわれわれにとってどのような意味のある環境を築くか、どのような新しい社会文化を構築するためのテーゼに他ならない（図-6）。

一方、築かれた都市という社会文化は、人工的に構築された世界であり、その目的は自然に対する目的と同様に、文化的生活を営むための有意義な環境を築くことである。すなわち、社会文化の中に有意義な環境を創出するという目的に対しては、自然と人工とは決して相反する概念でなく、むしろ一つの方向に対して共生し得るものであろう。

地球環境といった自然を保護することが、われわれの最終目的ではない。われわれが、自然に対してどのような意味づけを行なうかは、われわれがどのような社会文化を築くか、どのような新しい文化を形成するのかとい

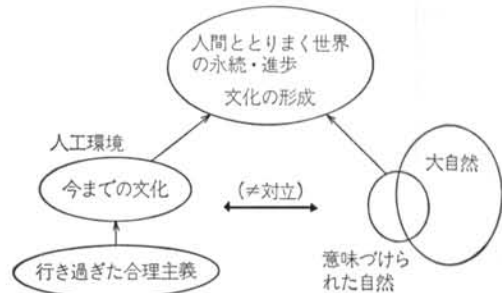


図-6 どのように意味づけていくのか

う目的に対して、どのように位置づけるのかが問われているのである。

§ 4. 近未来都市の抱える問題 一必要とされる通時的視点—

われわれは、未来の都市像を悲観的にも楽観的にも描くことができる。しかし、最終的に発展するのか、破滅するのかの保証は何もなく、また物象化した世界は不連続であり、予測することさえ困難である。われわれの意識は、世界の破滅後に、自分のみ生きながらえている姿さえ見出ししてしまう。

スウェーデンでの原子力発電の再開始や、地球環境問題の討議中に湾岸戦争によって生じた地球規模での環境破壊、また地球環境サミットにおける南北問題や、自国の利害に絡むときの猛反対等の例を引き合いに出すまでもなく、われわれの未来像の在り方が単に正誤のみでの判断による単純な結論は生みにくい。そのうえ、現状のまま停滞することも、また後戻りすることさえも許されず、何かに向かって進まざるを得ないのが実情であろう。

また、物象化した世界はわれわれの意識を変化させ、さらに新たなモノを刺激として求める。現代社会は、モノや情報に溢れている。その中でわれわれは自由を享受し、あたかも価値観は多様化しているように見える。しかし、真に価値観は多様化しているのであろうか。モノは細分化し多様化しているが、われわれはむしろ次から次へと生産されてくるモノや情報を、受け身的に消費をせざる得ないという状況があるのではないだろうか。受け身的な消費は、受け身的な差異化として自らの価値基準を消去してしまう。

すなわち、われわれの意思によって自由に選択しているように見えようとも、裏を返せば一つのことを執着することは許されず、受け身的で表面的な思考に慣らされている状況にあるのだともいえる。

このような現状下では悲観的にならざるを得ないが、前述した物象化した世界が問題点を引き起こす社会文化の様相や、自然に対する意味づけの歴史的な変遷はいずれも通時的視点から見出されることに気づくと、『時間』は何らかの示唆を与えてくれる。ここで時間に注目すると、時間や過去や未来、その先にある死といった非在の現前すらも、われわれの意識の中で作り上げられたものであることが分かる。

こうした時間の意識が未来を予見させ、社会文化を構

築しているのだが、それは意識のままに温存されるのではなく、どのような種類の意識であれ物象化されるといふ事例に違わず、われわれは時間を物象化した。すなわち、時間という意識の物象化が時計というモノになったのである。

生産の時間という『時間どおりに生きる』ことは、われわれを安全裡に強制するシステムであり、こうしたデカルト的時間の枠組みの中で一様で、絶対的な時間を要請され続けてきたのがわれわれである。近代人の日常的な時間意識もこうした背景のもとで構築されてきた。アタリのいう『世界時間』は、〈私〉の時間と他者の時間がより合わされ、共軌的な現実を生きるように仕向けられている。

一方、このようなデカルトの時間論に拮抗する形で、ホールは文化としての時間を論じ、『生物的時間』『個人的時間』『形而上学的時間』『聖なる時間』等の9種類の時間があることを示した。また、エンデは時間の花として内的な時間の重要性を述べている。

このように、空間や自然のみならず、時間に対してもどのように意味づけていこうかが問われているのではないだろうか。ポンティはいう、『〈私〉が、どこまでも世界に対する関係であればこそ、この関係に気づく唯一の仕方は、この運動を保留し、それとの関わり合いを拒絶し、あるいはその活動を停止することでしかない』と。

このように考察すると、われわれにとって何よりも都市や社会文化の仕組みを理解するとともに、われわれの意識の中に都市を空間的に共有していると同時に、歴史的、通時的に共有しているという視点が必要なのではないだろうか。

近未来都市の抱える問題とは、真にわれわれの意識の中にある。われわれがどこから来て、どの方向へ向かおうとしているのか、どこに帰着しようとするのかが問われなくてはならないだろう。

§ 5. おわりに

都市という人工環境に求められているのは、自然といかに調和させるか、どこまでの開発ならば許容されるか、またいかに自然を模擬できるかといったテクニックではなく、われわれが文化的生活を営むために、自然に新たな意味を付与し、どのような意味のある環境を構築していくかといったわれわれの姿勢である。

都市は単に一個の完結した組織であるばかりでなく、外に向かっては経済、社会、政治の中核として周囲の地

方に対する支配，サービスの役割を果たし，制度や社会慣習などの変化の原点である．新しい都市は，単に現在の都市の抱える諸問題を解決する対処療法的な都市ではなく，新しい文化の原点でもあるべきであろう．

また，都市は絶えず不連続に変容を続ける．そして，

非在のものを現前させ，モノがモノを生むという不連続で錯綜した世界でもある．しかし，都市を欲動のウロボロスとして捉えるのではなく，何よりもわれわれがどこに帰属し，どの方向に向かっていくのが啓発されるような近未来の都市像でなくてはならない．

<参考文献>

- 1) 羽根ら：“意味的環境の認知と行動に関する研究（その1）～（その6）” 清水建設研究報告 第49, 51～55号（1989年～1992年）
- 2) 羽根ら：“地下居住空間の研究課題と展望” 都市地下利用国際会議'91 講演集（1991年12月）
- 3) 羽根ら：“地下文化の様相” 丸善（1990年4月）